オモトの果実を加害するハマキガ類 2 種

駒井古実・那須義次*・斐 良燮**

(大阪芸術大学・*大阪府病害虫防除所・**大阪府立大学)

オモトは室町時代末期から鑑賞用に栽培されてきたが、栽培面積が限られているために、これまでその害虫相についての詳しい調査は行われてこなかった。オモトの害虫として従来からカイガラムシ類やアザミウマ類などが葉を加害することが知られている⁴⁾。しかし、果実の害虫については報告されていなかった。1991年10月19日および22日に大阪府和泉市善正町の農家で栽培されているオモトの果実の害虫調査を行う機会があり、若干の知見を得た。本報告では、今回の調査で判明したオモトの果実の害虫について、加害状況や形態について簡単に報告し、今後の参考に供したい。調査に際して多大な便宜をおはかりいただいた、大阪府立花の文化園の石崎周作氏、和泉市の井上正弘氏に厚くお礼申しあげる。

ミエヒメハマキ *Lobesia mieae* KAWABE

本種はオモトを寄主植物とする種として知られているが、野外での採集例は非常に少ない^{1,3)}。しかし、今回の調査でオモト果実にかなり多発することが明らかになった。

1991年10月19日、22日に採集した幼虫は中齢～老齢幼虫であった。この時期には幼虫は果実中に深く食入していた。しかし、果皮表面近くに褐色の摂食跡が

みられたことから、若齢時代にはまず果皮に浅く潜入して、その周辺を加害するようである(第1図)。幼虫は通常1果実に1個体見いだされた。また、1集合果に幼虫の加害が集中する傾向がある。大部分の幼虫は10月中に果実を脱出し、飼育容器の底に敷かれたティッシュペーパーの中で紡錘形の繭をつくりそのまま蛹化した。野外では果実から脱出した後、周辺の落葉等の中で蛹化するものと推定される。室内では一部の蛹から成虫が11月から1月にかけて羽化したが、野外では越冬は蛹態で行われるものと思われる。成虫の詳しい出現時期は不明であるが、8月上・中旬と9月上旬に成虫が採集されている^{1,3)}。

成熟幼虫(第2図)はやや肥満し、動作は比較的緩慢。体長約9mm。頭部および前胸背楯は淡黄褐色。前胸背楯の側縁部は黒褐色。体色は最初、黄灰褐色、その後淡赤紫色、蛹化前には紫色になる。刺毛基板は胴部と同色。

チャノコカクモンハマキ *Adoxophyes* sp.

チャの重要害虫として知られる種で、寄主植物として30科54種があげられている²⁾。オモトからは今回初めての記録である。個体数は今回の調査では少なかった。

第1図 ミエヒメハマキによるオモト果実の被害

第2図 オモト果実に食入しているミエヒメハマキの成熟幼虫

幼虫は最初果実に食入し、後に外部に出て果実を糸で綴る。室内飼育下では11月中旬に蛹化, 11月下旬に成虫が羽化した。野外では幼虫で越冬することが知られている²⁾。

成熟幼虫は細長く、活発に活動する。体長約 18 mm。頭部は淡黄褐色。体色は淡黄緑色。

引用文献

- 1) BAE, Y. and KOMAI, F. (1991) Tyô to Ga 42 : 115-146.
- 2) 本間健平 (1972) 園試報 C 7 : 1-33.
- 3) KAWABE, A. (1980) Tinea 11 : 17-31.
- 4) 上住 泰・西村十郎 (1975) 原色花の病害虫, 農文協, 東京, pp.469.